

そして今は、ひどく不機嫌になっている自分がいる。つまり、これはもしかして。もしかしくなくても

はあ、と深くため息をついた。

(そっか)

納得して、苦笑する。

(僕、臨也さんのこと好きなんだ)

恋愛ごっこのはずなのに。ただの短期バイトなのに。それなのに、彼の言葉を戯れ言と知りつつ喜んで。ほかの誰かに優しく微笑んで会話しているのを見て、嫉妬している。これは恋なんだろう。きっと、たぶん、おそらくは。

考えたくなかったのに、気づきたくなかったのに、それでも考えて気づいてしまう。そんな自分に苦笑するしかなかった。

なるほど、臨也は正しい。ごっこだと理解していても、自分は彼に恋をした。恋するべき相手ではないと知っていたのに。それなのに、なぜなのか、どうしてなのか。彼に、恋をした。

優しく笑うから。会話が楽しいから。深い理由なんてない。だから今まで気づきもしなかった。

今となっては、恋人ごっこに応じた結果恋をしたのか、自分が気づいていなかっただけで元々彼に恋していたのかもわからない。わかっているのは、ただ一つ。

(僕って趣味が悪いんだ)

顔と声とスタイルは極上かもしれないが、金も持っていないが、それでも性格は悪いのに。

それこそ、セルティも新羅も止めるほどに悪いのに。

こうなることがわかっていたから、彼女たちは自分を止めたのだろうか。理解していても、恋人ごっこにすぎなくとも、いつしか自分は本気になってしまいかもしれないと。

結果がどうなるか知りたい、と臨也は言った。結果、恋人ごっここと知りつつ自分は恋をした。ならば、これで臨也の疑問には回答がでたことになる。現時点で臨也はその回答を知らないが、帝人が告げればそれで全てが終わりだ。

(そうだ。それで、終わる)

ならば告げるべきなのだろう。それでこの恋は終わるし、恋人ごっこも終わる。それだけの話だ。そう、それだけの。

そう思うのに、苦い笑みは深くなるばかり。そうするべきだと知りながら、きつと自分は実行できない。あらかじめ終わると知っている関係だ。自分が言い出さなくとも、そのうち臨也は飽きるだろう。そうすればどうせ終わる。それならば、そのときまで。もう少しこの関係を、期間限定の恋人ごっこを続けても良いのではないか、と思っていた自分がいる。

もしかしたら、すでに臨也は飽きているのかもしれない。今日はなくとも、明日飽きるのかもしれない。長くても、せいぜい一ヶ月。つまりはあと二十日程度だ。

今、自分から言い出すのは心理的に難しい。だって、自分は好きなのだ。彼にとって演技でも、ごっこ遊びでも、自分はそうでなくなってしまった。